

## Applied Linguistics and Material Development

### Ch.3 Complexity, accuracy and fluency from the perspective of psycholinguistic second language acquisition research (4-5, pp.56-67)

#### 4. Empirical investigations

##### 4.1 Linguistic competence : Triggering in L2

- 言語能力は正確さと複雑さに直接関係する。
- 例： verb raising(繰上動詞)に関する、英語とフランス語の違いについて。
- フランス語は動詞が繰り上がるが、英語は繰り上がらないため、L2 学習者は、その UG における規則を再設定しなければならない。
- Herschensohn (1997)は、仏語学習者の verb raising 学習について、熟達度別に検証した。
- Hawkins et al. (1993)は、UG の parameter を再設定(re-setting)することは困難であるが、上位群ができていたことから、再設定が可能であるとした。中位群は、まだ設定できていないため、L2 の模倣(mimicking)にとどまり、他の UG 構造を用いる可能性がある。
- それに対し、Herschensohn (1997)は、constructionist 仮説を支持し、L2 学習者は、最初 L1 の知識を破棄して、徐々に L2 知識を適応していくと述べた。再設定は、瞬時に起こるのではなく、多くのインプットにより徐々に起こるものである。
- 重要なことは、学習者は、corrective feedback, 長期の input を経ることで、より詳細で複雑な構造の知識を得ることができることである。

##### 4.2 Building mental representations for learned linguistic knowledge

- 学習による言語知識は、“implicit tallying” (N.Ellis, 2005)と呼ばれ、文脈中の語を読解、聴解することで学習し、知識を得る。
- 一方で、言語能力との interface(融合)という見解は異なるもので、言語能力と学習した言語知識との相互作用が重要となる。正確さと複雑さの促進は、この相互作用に影響を受ける。
- 明示的知識が、暗示的知識となるかについては論議があるが、全ての知識は最初は明示的で、適切な場合にその知識が方法的記憶に移行され、流暢さにつながる。
- 学習された言語知識と言語能力の違いは、意識に関係し、triggering は無意識的過程である一方、明示的ルール応用の応用は、意識的過程である。
- triggered knowledge は、L1 のように手順化(自動化)された知識(proceduralised knowledge)であるため、学習した言語知識よりも流暢さを促進させる。

以下、明示的指導が、暗示的知識を促進させたという研究 2 点。

①Housen, Pierrard and VanDaele (2005)

- 内容：仏語の受け身と否定形の明示的指導の結果、即時性のある発話でも効果が見られた。よって明示的指導が暗示的知識も促進したことを示す。
- 批判：SLA の観点からではなく、既有知識の手順上の枠組みにのみ当てはまっている。R.Ellis(2001)は、即時性のタスクにおいても、素早く応用できる明示的知識を得たにすぎないと述べる。

②R. Ellis et al (2006)

- 内容：明示的 corrective feedback は、recasts による暗示的 feedback よりもより暗示的学習を促進する。
- 既に学習した内容については、corrective feedback が有効であるが、それは、triggered knowledge と同じではない。

#### 4.3 Mental representation in language processing: Proceduralization

- procedural knowledge が、どのように他の知識と相互作用して再構築されるかに関しては、学習者の産出の研究が重要となる。その中で、知識の変化をどのように測定するかと、即時的・明示的知識と、暗示知識をどのように区別するかが重要である。
- 時間に関する変数に関する先行研究の中で、最も重要な変数は、Speaking Rate (SR)と Mean Length of Run (MLR)である。
- SR は、ポーズも含むため全体的な流暢さの指標となる。MLR は、ポーズ間の連続した発話で、発話ユニットを符号化する能力の指標となる。MLR が長いことは、短時間により多くの要素が含まれることを意味する。
- SR と MLR が速くなり、同時に error とポーズが少なくなると、発話者はより速い正確な発話で、より手順化されている。

筆者の仏語学習者の発話に関する研究の紹介。

- 12名の仏語学習者の再話を4年間測定。SRはポーズを入れて、1分間の音節数、MLRは、ポーズ間の音節数で測定。
- SRとMLRは、6か月の仏語圏の滞在で伸び、滞在終了後も伸びたが、L1の速度には至らなかった。
- 以下3点の結果となる。①得点の個人、グループレベルでの伸びは、知識の順序化（自動化）を意味する。②SRでの2名を除いて、SR、MLRにおいてL1(英語)はL2(仏語)よりも得点が高かった。③仏語は英語よりも得点が低かったが、個人間で共通であった。
- 得点の違いから、L2はL1と同じようには習得されることが分かる。母語としての英語の構造は引き金となり、学習された言語知識は学習過程で習得され、両者は相互作用により順序化される。4.1に提示されたように、理論上と同様に仏語の知識が自動化されていたことは示すことは難しく、mimickingやconstructionsの学習に過ぎない。
- 個人差、working memoryの違いの要因も、SRとMLRに影響を与えていることも、流暢さについて論じる際に考慮しなければならない。

## 5. Conclusion

- 本章の心理言語のSLAの観点からは、正確性、複雑性、流暢性のある発話は、言語能力の伸びと、学習した言語知識と言語の加工能力の発展の間での、相互作用によって可能となる。
- 正確性は正確な知識を正確な方法で貯蔵していくこと、複雑性はL2の構造と語彙を推敲することと関係する。
- 言語能力、複雑性の伸びを示す要因は、UGの自動化が起こっているかどうかで決定することができる。
- 本章の実証研究は、いつ自動化(triggering)が起こったかを明示することが困難であることを示した。学習者はL1の構造知識や学習した言語知識によって、複雑さと正確さが中級程度のinterlanguage(中間言語)に達する。
- 流暢さは、熟達度の高いレベルを除いては、自動化された知識よりも、短時間で学習された言語知識に頼る。

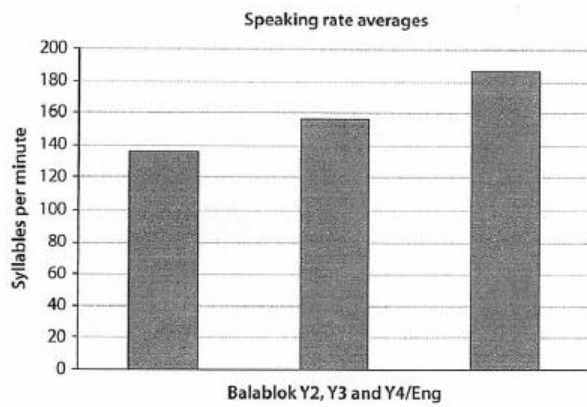


Figure 1. Average speaking rates in L2 French and L1 English

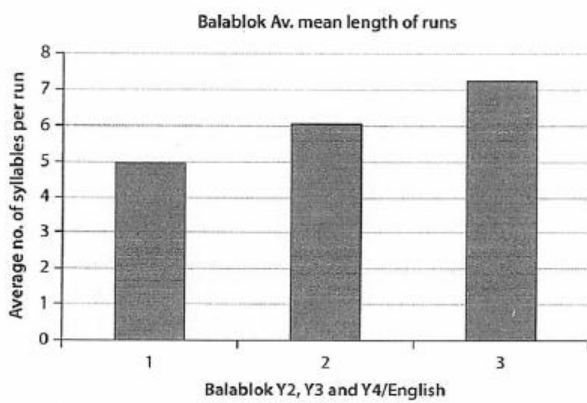


Figure 2. Average mean length of runs in L2 French and L1 English

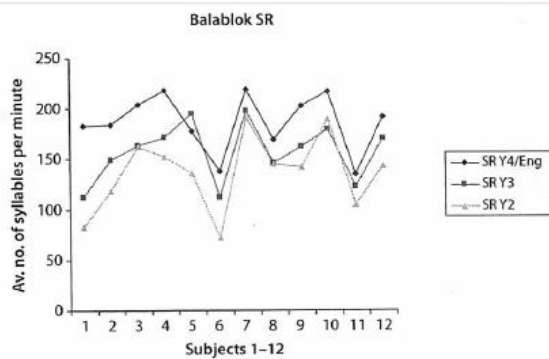


Figure 3. Individual speaking rate scores in L2 French and L1 English

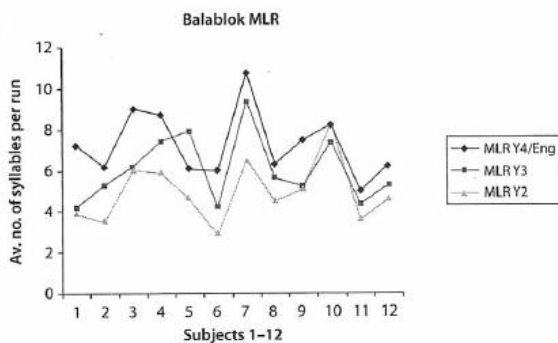


Figure 4. Individual mean length of run scores in L2 French and L1 English